

の採水が水瓶化完成予定の昭和五十一年前に行なわれる
としたら濁水期に於ける霞ヶ浦、北浦の事態は今夏より
一増悪化して収拾つかなくなるが、あきらかであり、
速やかに常陸川水門を元来の使命のもとに運営すること
が事態の経過から見れば行政者の責任であると思う。それ
は産業発展のための手法があまりにも無軌道に原始的産
業を犠牲にして、自然を破壊し、人間の健康を害する因
となっておるからである。今日県は塩水の流入を理由
に常陸川水門の開放を拒んでおるが経過から見ればその無
責任さを大きく感じる。(続く)

市民と科学者のつどい『霞ヶ浦 はどうなる』をかえりみて

相田 徳 二 郎

科学者会議では三年ほど前から霞ヶ浦とそれに流入す
る河川(桜川、新川、境川、備前川、花室川、清明川そ
の他)の水質などの調査をやつてまいりました。その結
果の一部は前に私共の方の高村さんが本誌にも書いてお
り、また私共で出しております「茨城の公害」その一と
その二に載せてございます。今年になってから、土浦の
周辺で、霞ヶ浦の問題をテーマにして、市民と科学者の

集会をもって、霞ヶ浦の実態がどうなっているのか、現
在判っている範囲で、そして私たちにできる範囲で、ひ
とつ総まくりの知識をまとめ、問題点もあきらかにして
みようではないかという話のできました。そこで四月
に入ってから、土浦の自然を守る会、土浦市民の会、新
婦人土浦支部、自治労霞ヶ浦研究会、茨教組教研グル
ブ、茨城県高教組公害対策委員会などの団体におはかり
したところ、たいへん積極的な賛同がえられました。
自然を守る会など前三者の市民団体ではかねてから霞ヶ
浦の問題には関心をもっておられたし、後三者の組合の
方々も霞ヶ浦研究会とか公害委員会の方々に常づね霞ヶ
浦に関心をおもちの方々なので、当然であつたと思いま
す。

そこで、これらの団体で実行委員会をつくりまして、
準備にとりかかつたわけでございます。各団体の仕事の
分担も実行委員会のなかで話しあつて、科学者会議の方
は講演と展示の方の準備を受けもつた次第です。「つど
い」のポスターとビラは佐賀先生のおきもいりでたいへ
ん立派なものを作つて頂きました。会計の方は自治労の
方に責任者になつて頂いたりしたわけです。

講演の内容は、三つにわけて、その一つが霞ヶ浦の水
利用の問題、第二に汚染の問題、最後にこれらを総括し